

最新情報やオススメ情報などをお届け中！



## 企画展

あそこがれの  
帯留・かんざし

さんごをまとう

## 神秘の宝石「さんご」

3月の誕生石の1つ「さんご」。宝石として扱われていますが実は石（鉱石）ではありません。海に住む刺胞動物〜クラゲやイソギンチャクのなかま〜の骨格を磨いたものです。「それもそうか、さんご礁で採れるんだし…」と納得してはいけません。宝石になる種類のさんごは、光あふれるさんご礁ではなく、水深数百〜千メートルの暗い海の底で何十年もかけて枝のような姿に育ちます。さんご漁師は長い長い縄の先におもりを付けた網を海底に流し、枝をからめて引き上げるのです。

## 「胡渡り」から国産へ

海の生命力を閉じ込めたような赤い宝石・さんごに人は古くから魅せられてきました。利用の歴史は旧石器時代にまでさかのぼりますが、明治初年に至るまでその産地は地中海に限られていたのです。江戸時代の日本人は、はるばる海を渡ってやってきたさんごを「胡渡り」と呼び珍重しました。日本近海でも網にかかったり釣り上げられたりすることはあったのですが、ぜいたく品を禁止する政策もあり、積極的な漁は行われてきませんでした。

しかし明治初年、高知の沖でさんご漁が始まります。ちょうどその頃、漁と加工の本場イタリアでは禁漁令が出され、市場が混乱していました。高知へやってきたイタリア商人は、赤、ピンク、白、斑入りとバラエティ豊かなうえに大振りで硬質なさんごに大喜び。以来、さんごの原木が盛んに輸出されるようになりました。やがて原木のままではなく、国内で加工して付加価値を高めようとする動きも生まれ、大正時代には日本人の好みに合わせ、彫刻を施したかんざしが登場、昭和初期には彫刻帯留が大流行しました。

## 職人が磨き上げ、女性がつくしんだ装身具

この展覧会では、さんごのかんざし・帯留をたっぷりご覧いただけます。花、動物、水辺の風景…極小の彫刻にこめられたちいさな宇宙。これらを手にした当時の女性たちのときめきを感じていただければ幸いです。

画像上より：薬玉象嵌櫛、鯉彫刻帯留、波乗り兎彫刻帯留、石榴桜桃彫刻帯留、菊彫刻かんざし、鈴蘭彫刻帯留

人の手がみがきあげた  
海の恵み

令和8年3月20日〔金・祝〕  
— 5月24日〔日〕 —  
会期中無休

## 総合展示室 展示情報

令和8年度  
総合展示室 第1期 2月27日(金)～5月11日(月)

### ピックアップ 高知城下郭中図

上級武士が居住した高知城下郭中を描いた絵図です。元禄11年(1698)の大火以前の町並みを描いたものと考えられ、火除地などの火災対策が実施される前の郭中の様子がよく分かります。このほか、豊富な実物資料から土佐藩の歴史をご紹介します。



令和8年度  
総合展示室 第5期 2月13日(金)～4月13日(月)

### ピックアップ 婚礼道具

武家にとって婚礼は家格を保ち権威を示すための重要な儀式でした。婚礼の際に女性が嫁ぎ先へ持参した婚礼道具には、その格式にふさわしいデザインや豪華絢爛な蒔絵装飾が施されています。気品あふれる大名調度の世界をお楽しみください。



土佐藩の歴史

大名道具と  
土佐の文化

城博コレクションの  
名品逸品

## 見立挑灯蔵大序

古文書をはじめとした歴史資料や歴代藩主の御道具など6万7千点の土佐藩・山内家資料を核とした土佐藩・高知県ゆかりの収蔵資料の中から学芸員がオススメの名品や隠れた逸品をご紹介します。

歌川国芳画 梅屋鶴子賛  
弘化4年(1847)  
縦35.3cm×横23.5cm

折り紙の兜を持った女性にじやれつく子供。一見ふつうの美人画に見えますが、実は歌舞伎「假名手本忠臣蔵」の冒頭、鶴岡八幡宮の場面を暗示しています。ものごとをそのまま描かず、何かに置き換えて表し、見る人に謎解きを迫る「見立て絵」です。たくさんのお兜の中から新田義貞の兜を選ぶよう命じられた顔世(塩判判官の妻)。義貞が使っていた香の記憶によって、見事選び出しますが、そこに居合わせた高師直に「つこく言い寄られます。彼の執着はやがて多くの人々を巻き込み、討ち入り事件へと発展していくのです。」

画面では義貞の兜は折り紙に、師直は子供へと置き換えられています。左の文字は狂歌で「かんざしにさししひさごのつるが岡名香かをる少女女子が髪」。ひさご(ひょうたん)の蔓と鶴岡八幡宮の鶴を掛詞とし、義貞の兜の香を女性の髪に香へと重ねています。向かって右側の小さなかんざしをご覧ください。赤いさんごを2つ並べたひょうたん形です。さんご玉一つを用いた玉かんざしが登場したのが文化年間(一八〇四～一八、その発展型「ひさごかんざし」)の流行は嘉永(一八四八～五四)頃といわれています。この作品はまさに流行の最先端をとらえたものといえます。黒い髪、白い肌、真っ赤なさんご。事件の予感をほらんだ心憎い作品です。

資料学芸課 主任学芸員 尾本師子

## 活動レポート

### お月見の会・お正月の会

当館では、日本に古くからある年中行事を、食や伝統芸能、展示を通してお楽しみいただく「季節の行事」を年に数回開催しています。毎年定員を大きく上回るお申し込みをいただく、当館でも人気の高い催しの一つです。

11月9日(日)夜には、十三夜に合わせて「お月見の会」を開催しました。会では、1200年以上の歴史をもつ音楽、雅楽の演奏と舞の鑑賞の他、当館所蔵の『生菓子図案集』から秋にちなんだ菓銘の和菓子と抹茶、月や秋のモチーフがあしらわれた美術工芸品がならぶ展示室をお楽しみいただきました。

年が明け、1月11日(日)には、新春を寿ぐ「お正月の会」を開催しました。箏と尺八による演奏をお楽しみいただいた後、別会場にて、山内家伝来の正月料理と和菓子・抹茶をご堪能いただきました。また、干支や新年にふさわしい縁起のよい資料がならぶ企画展もお楽しみいただきました。

五感を通して歴史や伝統文化に触れ、季節感を味わっていただく「季節の行事」。会終了後、「参加者からは普段味わうことができない特別な時間を過ごすことができた」、「日本の伝統芸能、文化の魅力を再発見する機会になった」等の嬉しい感想が多く聞かれました。当館では、今後も引き続き、色んな形で日本の歴史や伝統文化を体験していただける催しを多彩に開催していきたいと思っています。

教育普及課 主任学芸員 中屋真理

### 季節の催し



### 「地域学芸員」養成講座

当館では令和元年より毎年、市町村文化施設の諸活動に協力し活躍できる地域の人材を育成する目的で、本講座を行っています。本年度は高知市(城博会場)と香南市(地域会場)で開催しました。例年、月1回・全10回の課程で開催していますが、新たな試みとして、地域会場では、香南市主催の文化財講座及び香我美市民館趣味教養教室との共同開催で、8月から12月までの5ヶ月間・月2回の短期開催の形をとりました。

講座が始まる前は「博物館で活かせる知識や技術を身につけられるか」「じっくりと課題に取り組む時間とることができるか」「古文書を全く読んだことがないが大丈夫か」などの不安の声もありました。しかし、いざ始めてみると、受講者の皆さんは終始、意欲的な姿勢で取り組んでいました。特に「資料取扱」や「資料撮影」では、お互いに声を掛け合いながら、実技を進めることができました。

また、今年度は講座内容をより実践的に学ぶため、2日間にわたり、地元香南市に伝わる未整理の地域資料を教材として、資料調査を行いました。受講者の皆さんは、資料をクリーニングし、番号を付け、大きさを測り、写真撮影するという、一連の調査作業を行いました。こうして自分たちの手で資料を整理できたことが、確かな手ごたえとなったようです。

なお、近年では当講座の修了者を対象に、身につけた基礎的な知識と技術を地域での活動に活かすために、資料保存や資料撮影など、さらに専門的な技術を養成する「フォローアップ研修」も随時行っています。

総務企画課地域企画室 主任学芸員 片岡剛



地域資料の調査風景(香南市)